

古代アメリカ学会 第 17 回西日本部会研究懇談会のお知らせ

第 17 回西日本部会研究懇談会を以下の要領で開催します。ふるってご参加ください。事前申し込みは不要です。また非会員の方も参加できますので、周囲に関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひお声をおかけ下さい。

〔研究懇談会タイトル〕

『一般調査で何がわかるか』

〔研究懇談会概要〕

今回の研究懇談会は『一般調査で何がわかるか』というテーマで、大学院博士後期課程に所属する 2 名の会員に最近の調査成果について発表していただきます。一般調査は現地調査の第 1 段階として実施されることが多く、かつて取り組んだことがある、もしくは現在取り組んでいるという方も多いのではないのでしょうか。身近な調査手法である一方で、一般調査の射程は 1 遺跡の現状把握から、特定地域の政治・社会構造の復元やヒトー環境間のインタラクションの変遷の把握、さらには広範囲における地域間交流のあり方の推移の探求にまで及びます。地域間交流のあり方の検証、形成期の遺跡の現状把握という異なる問題意識に基づく 2 つの発表について、コメンテーターを迎え、議論を深めたいと考えておりますので、是非この機会にご参加いただき、活発に議論・意見交換をしていただければと存じます。

〔プログラム等〕

・日時：2025 年 5 月 17 日（土）13:20～16:20

・プログラム

開場 13:00

趣旨説明 13:20

発表 1 13:30～14:30

小休憩 14:30～14:40

発表 2 14:40～15:40

コメントおよび質疑応答 15:40～16:10

閉会挨拶 16:10

・会場：関西外国語大学 ICC ホール（ICC4 階 6411 教室）

・主催：古代アメリカ学会

・連絡先：西日本部会研究懇談会世話人 土井正樹 (huarpa * kansaigaidai.ac.jp)

古代アメリカ学会事務局 (info * americacantigua.org)

(上記アドレスの * を @ に換えて下さい)

発表 1：地域間ルートの空白を埋める ーペルー北高地アンカシュ県コロongo郡の踏査からー

発表者：吉川主浩（南山大学大学院博士後期課程）

ペルー北高地のカハマルカ盆地、ワマチューコ地域、カリェホン・デ・ワイラス盆地では、形成期末期～地方発展期の末頃（前 200 年～後 600 年）に活発な地域間交流が確立され、そのルートが後のインカ道の原型になったとされる。本発表は、この南北方向のルート上の結節点と思われるアンカシュ県コロongo郡を対象とする。従来はワマチューコ地域やカリェホン・デ・ワイラス盆地での研究を基に、両地域を結びコロongo郡を通過する地域間ルートの仮説が提唱されてきた。一方で肝心のコロongo郡では、その仮説を裏付けるための編年や遺跡分布などの基本データが不足しており、事実上の空白地帯となっていた。

2024 年の予備的な踏査の結果、コロongo郡の大まかな遺跡分布パターンと、従来提唱されてきた地域間ルートに関する仮説を支持するデータが得られた。本発表では、踏査に至るまでの経緯、踏査結果、今後の課題について報告する。

発表 2：ヘケテペケ川流域広域一般調査 ー先史アンデス文明遺跡の現状ー

発表者：手嶋啓仁（埼玉大学大学院博士後期課程）

本発表では、2023 年 9 月 10 日から 10 月 1 日にかけてヘケテペケ川流域にて形成期（紀元前 3000～紀元前後）の遺跡を主な対象として行った一般調査についてその結果を発表する。

本調査はヘケテペケ川流域の形成期遺跡の所在及び現状を確認し、発掘調査対象となる遺跡を選定するための予備調査として行った。ヘケテペケ川を便宜上の下流域、中流域、上流域に区分けし、それぞれの区域で約 3 日～1 週間程度かけて踏査を行った。先行研究から所在の判明している形成期と考えられる遺跡を抽出し、現地にて表面遺構・土器の観察、GPS による 3 次元位置座標の測定、現在の状況及びその周辺環境の状態の記録を行った。調査の結果、抽出した遺跡の付近にある遺跡を含めて下流域で 16 遺跡、中流域で 18 遺跡、上流域で 11 遺跡の合計 45 遺跡を踏査し記録することができた。これ以外にも破壊され現存しない遺跡も 20 以上踏査している。また本調査で踏査した遺跡には形成期だけでなく、特に海岸地域では、地方王国期など形成期以後の年代を示す遺跡が多く含まれている。本調査によってヘケテペケ川の上中下流域において各遺跡の基礎データを取得し、その現状について確認することができた。